

第2回医療・病床懇話会の概要(南河内二次医療圏)

1 将来のあるべき姿の到達度を測定する指標(案)・病床機能分化の方向性等について

- 将来のあるべき姿の到達度を測定する指標として、「将来にむけて回復期への転換が必要な病床」を設定し、今後、地域医療構想の進捗状況をモニタリングしていくことについては、近畿大学医学部附属病院による移転の影響を考慮しなければならないが、概ね認識の共有を図った。
- 将来の必要病床機能について、回復期病床が不足としているが、近畿大学医学部附属病院移転後の試算では急性期も不足となっている。急性期医療は亜急性期医療を補えるがその逆はできない。急性期から回復期への転換は適切なのか疑問。
- 将来の必要病床機能を割合だけでなく、人口や病態等地域の実情に合わせ、実数を併記した上での議論が必要。
- 近畿大学医学部附属病院の移転後に新設される病院機能については、協定を締結している三者(近畿大学、大阪狭山市、大阪府)だけではなく、近隣の病院や医師会等と十分な協議が必要。

2 病院の将来プラン等※について

(1) 保健医療協議会においてプラン等の内容について説明を希望する病院

特になし

(2) その他、病院のプラン等に対する意見・質問等

特になし

※公的医療機関等 2025 プラン、新公立病院改革プランにかかる補足調査、将来に向けた病院のプランに関する調査